

矛盾より解決へ

E • Y 生

吾等は自分の生活を深く反省し、欲求を高くすればする程人生に固着する矛盾現象を明白に認知する事が出来る。然も是の矛盾は煩悶と懊惱を生み、人生の根本苦となる事は周知の處である。是等の煩悶と懊惱を人生の全体とし灰身滅智的死を最高理想とする厭世思想家や、又、宗教独自の深い精神領域を容認し得ないマルキストの偏狭な人生觀などの依つて起る原因は矛盾に對する眞の理解を持たない缺陷である。宗教的人間完成を理想とする我等は、特に眞の人生觀を獲得する意味に於て、矛盾より解決への道を追求して止まない。それが誰もが持つ本然的欲求である。私は今それ等に就いて卑見を述べて見たいと思ふ。

吾等人生に固着する矛盾は複雑であるが、大体二つの基調の上に成立して居るものである。其の一つは精神的矛盾とでも名付けやう、例へば正義の道を踏みながら苦しみ、不義にして然も榮へるが如き矛盾現象であつて、我等の目前に轉廻する事實である。獨乙の哲學者カントが「善人には善の酬があり、惡人には惡の酬があるといふ事が縱へ實際的妥當性を證明する事が出来ないにせよ、吾等の放棄し得べからざる要求である。」と言つて居るが、歎善懲惡の社會制度に慣らされて居る現代人は、恚うした矛盾を何等かの方法に依つて其の妥當性を徹底せしめようとして居る。彼のカントは兩者の必然性を妥當の要請といふ處から靈魂の不滅と、之を捌く神の存在を認めねばならぬと言つて居る。又、大聖佛陀が其の妥當を三世因果に依つて觀察せられた。

佛教の最高原理である因果律は「物に具はれる存在の理であり」「人に具はれる認識の範疇」であつて、侵すべからざる宇宙の真理である。此處に至つて吾等の生命が如何に永遠であるかが解せられその永遠の生命の中に於いて不義にして榮へるが如き矛盾現象は必然的に罰せらるべきであると確信して止まない。

かくまでに到達して始めて苦をば苦と悟り樂をば樂と悟る價值世界を見へ出すのである。然しながら吾等は今一つの矛盾基調の上に支配されて居る事を忘れてはならぬ。それは自然的矛盾である。自然は吾等を養育する事が自然本來の任であるならば、吾等の生存を脅かす天災、地變の如きは自然的な矛盾であるとも言ひ得る。現在平和な生活過程にある吾等が、何時この矛盾に依つて蹂躪せられるか知れない。古來より世人が、斯くした矛盾を天譴であると言つて居るが、私は人間の惡的行爲が自然界に影響して起つた現象であると考えへる。

大正十二年九月一日、關東地方を脅かした大震災は近代に於ける最も大きなものであつた。此の天災は吾等が從來餘りに自然の平和的方面にのみ慣れて、その戰鬪的方面を忘却しそれに對する防禦を忘れた酬ひと解する事が出来る。同年十一月十日御發布遊ばされた詔書の中に、そうした意味が十分に含まれて居る。尙遠く遡つて我國未曾有の天變地天はと尋ねれば承久から文應元年に至る四十二年間續いた種々の災禍を擧ぐるであらう。日蓮聖人の立正安國論の中に『旅客來リテ嘆イテ曰ク「近年ヨリ近日ニ至ルマデ天變地天、飢饉疫癘遍ク天下ニ滿チ、廣ク地上ニ迸ル、牛馬巷ニ斃レ、骸骨路ニ充テリ、死ヲ招クノ輩既ニ大半ニ超ヘ是ヲ悲シマザルノ族敢テ一人モ無シ」と言はれた如く古今東西に類例を見ざる處であつた。當時の救濟を目的とせられた聖人は四年の間精研せられ、遂ひにその天

災の依つて起る原因を觀破せられた、即ち同論に「信く、微管ヲ傾ケ、聊經文ヲ披キタルニ世皆、正ニ背キ、人悉ク惡ニ歸ス、故ニ善神國ヲ捨テテ相去リ、聖人所ヲ辭シテ還ラズ是ヲ以ツテ魔來リ、鬼來リ災起リ難起ル」と申された如く聖人も人間の人格的行爲が自然に交渉し、依つて如斯き災禍が襲來したのであると觀察せられた。斯様に人間の人格的行爲が自然現象に影響する事は不可能の様であるが、法華經の哲學とも言ふべき依正不二の原則（依報即ち天然現象と、正報即ち人間の精神的行爲とは、本來一体不二にして互に影響交渉する本質を有す）より是れを觀れば容易に解する事が出来る續いて現代思想界を風靡しつつある、マルクス主義者の偏狹な人生觀は、矛盾に對して眞の理解を持たない原因であることに就いて述べて見たいと思ふ。

現代の社會思想を展望するに階級の矛盾形態に依つて經濟上には、集産主義と共產主義とに分れ、政治上には、民主主義と無政府主義とに分れるが、是等の主張する所は、人に依つての人の搾取を廢し、萬民をして勞働に従事せしめ、其の勞働の果實を享樂せしめんが爲に生産機關の公有を實現せんとして居る。然して階級的闘争に依つてそれ等の矛盾を解決し、共產共榮の新社會を建設しようとしたのが、マルクスの唯物史觀的要領であつた。然し闘争に依つて、眞にその矛盾が解決せらるべき否か、勞農ロシヤのレニン政府（一九一七より）に依つて見る事實は之を具体的に説明して居る。生産に於ける怠慢、宗教、道德の破壊、人情風俗の頹廢となり、脅迫に依つて百七十六萬人を慘刑に處したるも共產制の實行は不可能となり、遂に私有財産を認め現在のロシヤに至つたのである。縱へ如何に社會主義を高潮しても、實際に移した場合如斯き慘狀を呈するものである。彼のマルクスの親友であつたエンゲルスは晩年に至つて科學の確實性の不承認を自白し、又彼のレニンも流血の慘劇を

經て始めて不可能なる事を告白して居る。飢には食を、寒さには衣を、と言ふが如き共存共榮の平等思想を主張した佛陀は出世の本懷たる法華經の中に差別即平等觀を立てゝ居る、此の、平等の中に差別を認める法華經主義こそ眞に階級的矛盾を解決する唯一の道であると信じて疑はない。

結局、以上述べた事を辿り辿つて行くと其の解決の方法は自己改造より外何者もないと同時に矛盾を離れて解決の道は無い事に氣付くのである。矛盾を離れて解決を求めようとした、即ち灰身滅智を理想的解決法とした厭世思想家などは、矛盾の中に人生の價値を見出せない、哀むべき片輪者である。

故に人生の矛盾性の解決は、矛盾に即して非矛盾を立てる處にある。即ち矛盾を廻避する事では無く、寧ろそれを機縁として永遠の大理想に向つて進み、努力する處に眞に大乘佛教の面目たる「娑婆即寂光」化となり、「我此土安穩天人常充滿」の理想境に住する事が出来る。

然しながら闇に放浪ふ事の多い吾等は、再び矛盾の世界に還り、又矛盾の人生を見るのである。日蓮聖人は、我等が矛盾と見る世界を非矛盾たらしむべく娑婆即寂光を高唱した、それは一つに聖人慈悲心の發露であり、その慈悲心が忍難弘教の、あの血涙の歴史的生涯であつた。吾等は唯だ、受持唱題の中に、佛と法華經と日蓮聖人の統一的主張を認識し、「完全な自己に還ろう」それが矛盾より解決への直道である。